

幼児教育の方法^ヲ (二)

東京女子高等師範學校附屬小學校主事

北 澤 種 一

(七)

さてナーセリースクールがどういふ點に力を置いて居るかは此法令によつても分る事ではありますが英國の教育制度では地方教育の力を持つてナーセリースクールを設け適當の設備をする事になつて居ります。ナーセリースクールの子供は滿二歳から五歳までであつて、都合によつては五歳以上の子供も入れてよいが、其の場合は文部大臣の許可を受ける事になつて居ります。そして身體的及精神的の發達につとめるといふ事であります。然も身體の發達にはあらゆる努力をせねばならないのであります。幼稚園が小學校と異なる點はナーセリースクールが示して居る様に精神上と身體上とを共に考へねばならない點にあります。身體的方面を特に我々が注意せねばならないと言ふ事は其の身體と精神の分化がはつきり分れて居ないといふ幼稚園時代の特色を尊重したのであります。そして身體的方面を力説して精神的方面を閑却しない程度に、即ち精神的方面には消極的に注意して行けばよいのであります。

(八)

ナーセリースクールに次いで起つたものはデー、ナーセリー、スクールであります。普通の幼稚園校は三歳から七歳までであつてナーセリースクールは二歳から五歳まで、デー、ナーセリー、スクールは満八九ヶ月から二歳までであります。それは託児所と同様なものでありまして、文部省の管轄によらず衛生省の管轄に屬して居ります。教育的と言ふよりも寧ろ社會的の事業であります。此の結果及効果と言ふものはまだあまり世間一般に知られて居ないものであります。今後新しい勢力を得て又大いに發展する餘地のあるものであります。ナーセリースクールがもし小人數の場合には之れをナーセリークラスとして行つてもよいのであります。クラスの場合には小學校の一部をかりて行つてもよいのであります。然し此の場合に於て注意しなければならない事は、往々小學校の精神にかぶれてしまふものがありますが、決して其の様な事なくナーセリースクールの務めねばならぬ所を務め、其の精神を忘れない様に獨立して行かねばならないのであります。そしてナーセリースクールとして務めなければならぬ事は一個人一個人の子供をよく觀察して特に衛生方面の注意を怠らない様にしなければならぬのであります。

(九)

ナーセリースクールは第一に従來の幼稚園といふものが考へて居た點よりもつと身體的方面に考へ

を置いたと言ふ事もあるが、更に一人の子供と一人の保姆の間が非常にうるはしく親密であつて、常に保姆の心は子供の中に生きて働いて居ります。第二幼児には適當な休息を與へる事が必要であります。現在の我が國の託兒所等に於ても幼児の休息と言ふ事を考へて晝寢等を用ひて居りますが、この遊び疲れたる子供を如何に休ましめるかはナーセリースクールの一つの仕事でありました。第三には幼児に適當な榮養を與へることであります。幼児に適當した食物を選定して與へることは幼児の發育には至極重要なことでありますから之を敢へてするのであります。

(一〇)

次にナーセリースクールには一定の訓練をする事を要します。それは1身體的、2精神的、3社會的で、この三つの訓練をする事が必要であります。然して身體的・精神的・社會的の事を訓練し、廣い意味の習慣を養成しなければなりません。然も其の習慣養成の方法に就いては賢い指導者の指導の下に行はねばならないのであります。之の習慣養成の方法が從來は極めて強制的でありまして教師の方から仕込まれる事ばかりでありました。即ち熟練した賢い指導者が此の子供には此の習慣が必要であるからといつて定まつた様な習慣をつけられるのであります。子供の自動的の遊嬉の中に得られる習慣の必要といふ様な事は全く顧られなかつたのであります。從來の幼稚園に於ては此の種のものが多く、自動的に得る習慣等はあまり考へては居りませんでした。自動的の習慣をつけると言ふ事の

爲には幼児を共同にして共同の生活をさせる事が必要であります。即ち色々の年齢の子供を秩序よく集合させるので四歳の子と五歳の子と聯合し、三歳と四歳と聯合させるといふやうに按排するのであります。元來人を統御し人に統御されるといふ事は幼児の心の中にも多く潜んで居る事でありまして大きいものは小さいものを統御し様とし、小さい者は小さい者で大きい者の統御を受け様と務めるものであります。從來の様に同年齡の子供を集合させる場合にはよく集合する事はしましたけれ共、右の様な大小の間の事實はあまり起らないのであります。年齢の差のあるものを一つにする時には色々の社會的交渉が起つて參りますが故に社會的訓練をするには最も必要な事であります。

ベスタロッヂ、フレートベルハウスへ行つて見ますと、各々の室がグループが非常に小さくて其の室にはすべての家庭的の備設がしてありまして飯事遊び等自由に出来る様になつて居りました。或室は四歳の子と六歳の子と交つて居りましたが之は極めて自然的であります。家庭に於ても一つの家族が同年齡の人が七人も八人もよつて居るといふ事は考へられないのでありますから即ち不自然な事ではありません。自然的にし様とすれば色々の年齢の子供を集めるといふ事は子供の自然の力を利用した、かつもつとも合理的なやり方であります。大きいものは小さいものを支配し、小さいものは大きい者に愛されると言ふ事は自然の力でありまして、ナーセリースクールが又此の點に力をつくした事は見るべきであります。この社會的見地から將來の社會を組織するものが如何に親密に組織するか、又

如何にしたならばそうさせられるかと云ふ事は教育家も政治家も心理學者も共に皆が研究して居る所であります。他の家から來た人と自分の家から來た人とスクールに來たからには直ちに人と人と密接に結合し接觸しなければなりません。どの點に於て結合し接觸するかは學校に於て訓練しなければならぬ一つであります。社會に於て同輩といふ考へが今日程要求される事はないのであります。外國人も自國民も男女も同輩であるといふやうに、平等的に考へられて來たのであります。そして同年齡又は同國民の結合よりも他國民と自國民と、又は年齡の異なるものとの結合は確實なものであります。何故ならば、同年齡の結合であつたならば、直ちに離散するかも知れないのであります。之れが差異のあるものに依つて作られた結合は本當にしつかりとした結合をし得るのであります。經濟上からも社會上からも歐洲の男女は或一面に於ては非常に強く結合し或一面に於ては全く離れてしまふものであります。此れには又種々な原因のある事と思はれます。

次に同一興味を中心として手段として働く時には愉快な生活をし意義ある社會生活を行ふ事が出来るのであります。

即ち興味の中心が一つであれば自然と四歳の子も五歳の子も先生も皆結合し得るものであります。ナーセリースクールとしての務むべき道としては先程申しました如く其の子供の發達を考へ之れを教へなければならぬ事は申すまでもない事であります。幼稚園とナーセリースクールとが大體御分り

になつた事と存じます。

(一一)

歐洲大陸を見ますと英國流のナーセリースクールは中々に盛んでありますが、やはり從來のモンテッソーリ式の考へと云ふものが或程度まで教育界を支配して居ります。此の點から言つてもモンテッソーリ女史のやり方と言ふものを考へて見る事も又必要な事と思ます。モンテッソーリの理想を考へて見ますと必ずしも新しい考へではなくて、彼が感覺を練習せしめる爲に考へ出した器械器具の類は從來からのものを色々に考へて、子供に適當なものに作り代へたに過ぎないのであります。モンテッソーリ女史は自動裝置といふ事を非常に考へた人でありました。自動裝置(組織)といふ事は生物學の研究と相待つて以來教育者間の問題とされて來たものであります。即ち從來の考へ方によりますと、幼兒及び兒童といふものは教育者と言ふ刺戟の下に、刺戟によつて反射するものであるといふ様に子供を反射的主體であるとして考へて來たものであります。然して子供を一箇の反射的物體としての考へ方は可なり長い間教育者間を支配致して居りました。故にこちらからどれだけの刺戟を與へれば子供の方からどれだけの反射をするかと言ふ様に精神的でなく物質的の考へ方であります。材料によつて反射し活動する器械であると考へますが故にどういふ材料を與へればよいか、よりよく多くの材料をあたへて多くの反射を得様として教育材料の研究が行はれて來たのであります。學校で言へば學

科課程ともなるのであります。

即ち材料の如何に依り反射の角度に大小が生ずると考へて居りました。その反射が活動の方面になりますと彼等の發表の仕事と言ふ事になつて來るのであります。發表活動、製作活動が幼児でも敎育上重要な意味あるものとして考へられて來ました。然るに兒童に對する考へが段々に研究されて來るに従ひ、子供は如何なる時にも外界から受けたものに對する反射運動のみをするのみでないと云ふことを考へて來たのであります。兒童を生物學的に見る考へが行はれて來て、兒童は外界から受けたものを其のまゝ外に出すのではなくて、幼兒は外から來たものにも外に出す物にも主觀が伴ふものであるといふ事が分つて來ました。

(二)

次に理解的心理學が主張せられる様になつて來ました。理解的心理學は從來の説明的心理學とは異なるものであります。從來の説明的心理學は説明するには十分であります。即ち泣くといふ事は悲しいからである。何故悲しいか。彼は大切な御菓子を取られたから其れが刺戟したのである。と考へて行けばこゝに十分説明がつき、説明的心理學としては十分であります。即ち或る件に對して原因をあげれば其れで満足し得るのであります。然しこの説明的心理學は主知主義でありまして、主知主義では本當に子供を理解する事は不可能であります。説明が分つた。それでは説明を理解したのであつて本

當に子供の心理を實際的に理解したのでは無いのであります。理解するのであつたならば其の心理に同感し共鳴するのではなくてはなりません。我々が神佛に祈願をするのも神佛が自分の心を心から同感し共鳴して下さると思つてつまりうつたへるのであります。又共同的體驗がなければなりません。即ち同感唯感じたのに過ないのであります。其れを體驗するのでなくてはなりません。子供が泣く時には説明的にすれば色々の原因も見出されるのであります。兎に角前からの道程があつて、事件があつて、其れが遂に感情にうつたへて感情の爲に泣くのであります。其の事件を經驗し同感し共鳴し之れを體驗してやる事が出来たならば、本當に其の子供を理解する事が出来得るのであります。心理學は特別に之れを學ばないでも長い間幼兒に接し大勢の子供に接してゐた人々は之を理解する事が上手であります。其の理解の仕方普通學者が説明的に理解するものではなく其の子供と同じ心になつて同感し得るのであります。自分の經驗を精製した人は其の子供を知り子供の體驗した事をよく理解する事が出来るのであつて、必ずしも心理學を多く學んだ人がよく子供を理解し得るものであるとは限つて居ないものであります。理解的心理學はまだ十分に發達してゐないのであります。心其のものゝ心理學にふれるといふよりも自分自身生れながらの幼兒に對する天才と自分の長い間の經驗とによつて子供の心を十分に理解する事が出来たならば此れ以上よい事は無いのであります。かのモンテッソーリ女史は科學的立場から考へて見なければならぬと言ふので、修養の材料として心理學

を學んだのであります。けれども彼は又天才的に子供を理解する事が出來得る人でありました。そして自動装置は幼兒の材料によらずに、自分の精神に何らかの反應を與へて其れに依り反射を否定するものであります。此の間を一貫した統一的の我が内界の刺激、外界の刺激によつて外界に表はすものが即ち製作及び發表であります。寧ろ私の活動があつて外の影響を取入れて我を延ばして行くものでありまして、其れを延す中に發表製作を行ふのであります。常に外界に對し我を中心として居るものであります。そして色々の機關を用ひながら然も反射的に進むのではなくて一直線に進むものであるといふ考へ方がモンテッソーリ氏の考へであります。その具體的の表れはモンテッソーリ氏の自動の教育でありまして、一例を上げますと、之れは有名な御話ですが、

聽覺の練習として室内をまつくらにして置いて其の眞中に幼兒を立たせ音のしない様に先生の所まで來て御覽なさいといふ命令を與へるのであります。子供はそろ／＼椅子を立つて先生の所に來やうと致します。すると衣ずれの音が致しますから非常に驚き、我と我が耳に聞えるので先生の命令に添ふ様にと言ふつもりで一心に音のしない様にとつとめます。

A ならAだけの音を立てますと自分の耳に又Aだけの響があり、Bの音をたてますと、又自分の耳にBに相當する音が聞えますからあわて足を制してそろ／＼と行ふ様にするのであります。又子供はBの音に失敗して更に氣を静め注意に／＼をして骨を折つて立ちより音を立てずに立てた事に本當に

自分ながら得々とするのでありませう。さあ立つて後先生の台圖に子供は再び注意しながら其の方向に歩いて參ります。其の時も前と同様に自分で自分の耳に聞える音に氣をつけて進んで行くのであります。即ちこの様なのは一例に過ぎませんけれども其の外からは唯ほんの僅かの刺戟のみしか與へず他は悉く内的刺戟によつて幼児自らがそうするのであります。そして幼児は先づ足の筋肉を調節した結果として音をたてずに先生の所に行けた。その事に無上の満足を感じるものであります。この様なのを稱してモンテッリーの自動教育といつて居ります。其の根底に横はる考へは我と云ふものは我々が外から教育しないでも其の我の力によつて幼稚園で要求する様な事は行ひ得るものであります。(未完)

幼児の自由か保育者の豫定か

附屬幼稚園 ム ラ サ キ

幼稚園で保育の手段としていろいろの作業をするのに、これを幼児の自由意志に従つて選擇を任すべきであるか、或は保育者の設定のもとにするべきものであるか。この問題については當園を參觀せ